遠い日のうた

谷内六郎著

修道社刊

郎 著

遠い日のうた　定価300円

昭和41年9月5日印刷　昭和41年9月15日発行

著者　谷内六郎　発行所　株式会社　修道社

発行者　秋山修道　東京都文京区本郷4の23の6
振替東京22455　電話(812)3397

表現社印刷　誠光舎製本

目

次

車で行った日　四
冬の影坊主　六
吸入列車　八
芽の出る音　一〇
春の横浜　一二
古きおひな様　一四
山間小駅　一六
ネムの木　一八
シグナルになったビー玉　二〇
すきとおる風船　二二
冬の花火　二四
雪国早春　二六
子供風土記　二八
ビールびんの色　三五
夏空に想う　四一
夕立讃歌　四三
七夕の空　四五
夏の終りに　五〇
空にのぼった貝　五〇
月見草　五一
二百十日　五四
オレンジ色の夢　五六
ドンドン焼　六〇
ガラスの夢　六二
お正月　六六
こまの音　羽根の音　七〇
年のはじめ　七八
春の晩の夢　八三
汽車の魅力　八七
汽車　九二
大阪のこと　九三
通天閣の夢　九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

倉敷のこと　一〇二
上総の海　一〇六
こけしの味　一一一
ぼんぼりの色　一一四
フィルムの二重うつし　一一七
ボクのビール工場見学記　一二三
ある日のお客　一二九
白昼夢　一三四
秘密の場所　一三七
お使いの楽しみ　一四二
詩の話　一四六
犬も歩けば　一五〇
雨だれのつぶやき　一五四
シケ王　一五八
マネということについて　一六二
抽象画　一六五
「春の祭典をきいて」　一六九
迷曲名曲　一七二
食事史　一七六

車で行った日

バックミラーにうつる町
今来た町が遠くなる
遠い小人の町のよう
おじさんとぼくが町に行った日
バックミラーの小人町
今来た道が遠くなる
豆つぶみたいに遠くなる
一直線の遠い道
水晶結晶の光の中
光線のように光る道

車のガラスをふくワイパー
時計のふりこがゆれるよう
霧でネオンがにじんでた
おじさんとぼくが町に行った日
車のガラスをふくワイパー
いっしょうけんめいふくワイパー
時計のふりこがゆれるたび
セコンドの音きくたびに
波紋のように浮かぶ町

冬の影坊主

雪虫　ホッホー
雪虫　ホー
白い障子の　白い外
ビョロン吹雪の　吹雪く夜は
雪虫　ホッホー
雪虫　ホー
いろりのほのおが　あかあかもえて
天井に影が　ゆらゆらゆらぐ
とうさん　かあさん　ぼくの影

雪虫　ホッホー
雪虫　ホー
裏山おじさん　やってきた
ひろみちゃんも　つれてきた
外はひどい降りじゃと　外套はたく
雪虫　ホッホー
雪虫　ホー
いろりのほのおが　あかあかもえて
天井に影が　ゆらゆらゆらぐ
わあ　いっぱい　にぎやかな影

吸入列車

ぴーよん　ぷーとる
ぴーよろん　ぴよー
吸入列車は
こずえをわたる
はいえんになると
いわれた夜
ぴーよん　ぷーとる
ぴーよろん　ぴよー

母がアルコール・ランプ
いれた吸入器
こずえにうるむ
星のまに
ぴーよん　ぷーとる
ぴーよろん　ぴよー
吸入列車は
走り去る
汽笛をのこして
星のまに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

芽の出る音

春先きの風は　ドアンムルー
ドアンムルー
雨戸を打つ音も　やわらかで
遠い海洋を　わたって来るの

春先きの風は　ドアンムルー
ドアンムルー
外灯の光も　やわらかで
遠い北の国で　芽をふくの

春先きの風は　ドアンムルー
ドアンムルー
ミルク色の夜明けの空も　やわらかで
遠い日おかあさんの　おちち飲んだの

ROKU

春の横浜

ボアリンボーと汽笛鳴る
これは横浜
春の晩
遠い日の春の晩
日本のことばのわからない
外国の子の話です
迷いごになった話です

ニョーリンちゃんと猫が鳴く
湯気のある晩
霧の晩
ねこやなぎは銀光り
春の海は
もやもや白く

なんにも見えず
迷いごの子　泣いた

トルメローさーんと犬が鳴く
湯気もなくなり
霧も消え
明かるい電灯光り
春の港は
もやもや晴れて
お船も見えて
かあさんも見えた
迷いごの子　笑った
笑った顔が　ほらね
オルゴールについている

古きおひな様

春のかげろう
草溶かす
菜の花畑に
パタパタお化粧
もん白蝶は日暮まで

日暮のぼんぼり
桃の花
ポツリポツリともる頃

ひ色のはかまのおひなさま
暗い野原に逃げて行く

ひ色のはかまの白い顔
逃げきれない暗(やみ)と土(つち)
ひ色のはかまは色あせて
白き顔はそのまんま
動きもせずにはげて行く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong